



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	フィンランドの樹木とともに生きる世界 : 死者のカルシッコに見る「エラマ」の物語 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	田中, 佑実
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第15065号
Issue Date	2022-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/85455
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Yumi_Tanaka_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 田 中 佑 実

主査 教 授 小 田 博 志
審査委員 副査 准教授 山 口 未 花 子
副査 教 授 宮 嶋 俊 一

学位論文題名

フィンランドの樹木とともに生きる世界
—死者のカルシッコに見る「エラマ」の物語—

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文の意義は、第一に、実証的にはフィンランドにおけるフィールドワークに基づいたカルシッコという現象の最初の文化人類学的なモノグラフであり、日本語では他に先行研究がない貴重な記録となっているという点である。第二に理論的な貢献として、近年の人類学で注目を集めている人間と自然、人間と他の生物種との関係性に関する問題を、上記の現地で得られた事例の分析を通して、独自の視点から論じていることが挙げられる。

死者のカルシッコという興味深いが、現代でも継承されているかどうかフィンランド国内でも定かではない現象を実際に調べるために、著者は粘り強く情報収集を行い、それを受け継いでいる家族を突き止めて、調査協力を取り付け、2018年8月からフィールドワークを開始した。それから2020年1月までの1年5か月の期間に断続的に現地を訪れ、調査を行った。日本帰国後も調査協力者の家族とインターネットを通じてコンタクトを保ちながら、カルシッコを巡る対話を重ねている。この現地経験とフィンランド語の理解によって、著者はフィールドの現実を内側から捉えることに成功している。それは「カルシッコ（枝が切り落とされた木）」や「ルオント（自然／死者）」「ハルティア（霊的存在）」「エラマ（生）」などフォークターム（現地に独特の概念）の意味合いに留意しながら、それらを効果的に用いて分析を進めていることだけではなく、文献資料だけではうかがい知れないカルシッコの樹木それ自身の存在感を、調査協力者との対話や、著者自らのフィールドでの経験から理解し、そこから斬新な問題を導いていることにも表れている。それはすなわち人間と樹木との相互影響的な関係性である。

このフィールドワークにおける発見から、樹木の行為主体性（エージェンシー）をも含めた研究上の視角を著者は導き、これを論じるための理論枠組みを的確に定めている。それが人類学において、従来の人類中心主義的な研究枠組みから脱して、人類以外の多様な生物種との関係の中で人類を捉えていこうとするアプローチである。著者はこれにただ依拠するに留まらず、カルシッコにおいて死者が重要なアクターとなることを踏まえて、生者と死者と樹木という三者関係を捉えようとする。これは理論的には象徴人類学とマルチスピーシーズ人類学とを融合させる斬新な視角だと評価できる。

現代におけるカルシッコの調査を通して、著者は生者と死者と樹木の三者関係をつなぐカテゴリーとしての「エラマ（生）」を見出し、生者が死者を追悼したり、あるいは生者が樹木に意味付与したりする一方的な図式ではなく、樹木と死者が生者の生活の一部となって、生者の「エラマ（生）」を支えてもいるという、生者と死者と樹木が「ともに生きる」現実を描き出している。これは象徴人類学に対しては社会の概念を死者と自然をも含めた形で拡張することを示唆し、存在論的転回以後の現代人類学には人間—モノ関係に通底する生命の次元に目を向けさせるものである。

・学位授与に関する委員会の所見

このように本論文は実証的にも理論的にもオリジナリティーの高い成果であり、その点を審査委員はいずれも高く評価している。また本論文の内容はすでに北海道民族学会、バルト・スカンディ

ナヴィア研究会、日本国際文化学会で発表され、『北海道民族学』、『インターカルチュラル』、『北方人文研究』の三つの学術誌に査読付き論文として掲載もしくは受理されている。その一方で、審査委員の間からは、本論文でのマルチスピーシーズ人類学に関する植物の位置づけの仕方や、現代におけるカルシッコの事例の一般化といった点に関する疑問が提起された。これに対して著者は口頭試問においてこれらの問題点を自覚していること、そして今後改善していくための展望についての的確に回答した。これらは部分的な問題であって、この独創的な博士論文全体の価値を下げるものではない。以上の審査を踏まえて、審査委員会では全員一致して、本論文の著者である田中佑実氏に博士(文学)の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。